

2015年3月8日礼拝メッセージ

タイトル「主に交われば、主（あか）くなる」

聖書箇所：ヤコブ 5：12~20

先日岐阜県関市にて、ファビオさんという日系ブラジル人の料理業者に会いました。彼は法律を学んでいたのですが、食品業者の父親の影響で、日本でのオリジナル料理卸の仕事を開始、コストコを始め、さまざまな食料小売店やレストランに自分の料理を提供しています。彼曰く「料理が好きな人が社長をしている場合と、そろばん勘定が好きな人が社長をしている場合とでは、料理の味があからさまに違っている。」いろいろと具体的な店名を挙げて教えてくれました。

私たちが教会として福音を伝えるにあたって、福音という最高の素材を提供しているのだ、ということを忘れないでいたいものです。教会運営というそろばん勘定に流されずに。

今日の聖句に「誓ってはなりません。」という言葉がでできます。主はなぜこのような戒めを与えているのでしょうか。誓ってもいいじゃないですか。誓いという強い意志というものは人が成功するのに必要条件なのではないのでしょうか。でも本当のそうでしょうか。書店に行けば平積みビジネス本が並んでいます。ある本はAと言い、ある本はBと言う。しかもそれぞれが正反対のときさえある、でもその著者達は一応成功しています。なぜでしょうか。人それぞれで状況が違うからです。その人の才能、環境、出会い、さまざまな要素が組み合わさってその成功はなされました。同じことをやって、同じようにうまくいくことなどはありません。でも人は同じ結果を期待して真似るのです。人の誓いというものも、結局そんなもの、なのではないでしょうか。

ペテロは誓いました。そしてその誓いを守れませんでした。マタイの10：32~33には「私を人の前で知らないと言うような者は、私も天の父の前でその人を知らないと言います。」という恐ろしい警告がありますが、ペテロはそれを守れませんでした。しかし、牧師の私もきっと守れないと思います。人間の肉は出来が悪いのです。「いや、わたしは守りますよ。」といえる人がいるかもしれない。その人はそれでいいです。すばらしい。でも私はそんな断言ができるような人間ではありません。

ペテロは誓いを守れずに地獄に行ったのでしょうか。救われなかったのでしょうか。決してそんなことはありません。十字架によって赦され、天国に堂々と凱旋しました。十字架はそのためにあったのです。もし何人かでも誓いを守れるような人間がいたのなら、自分を律することができたのなら、主は十字架にかかる必要はなかったのではないのでしょうか。もし誓うとしたら、「わたしの罪を主は知っている、私は弱さのゆえに主を拒むかもしれない。しかし、それでもなお主は私を赦しへと導いてくださる。その主の約束を私は信じる。」

と誓うことしかないのです。なんという恵みでしょうか。

ヤコブ 5 章には「義人の祈り」が出てきます。ある人はこう言います。罪を悔い改めて私は清くなりました。そして主は祈りをきいてくださいました！私は断食しました。主は奇跡を起こしてくださいました！すばらしい主の哀れみです。でもその人が断食したから、熱心に祈ったから、そうなったのではないと思います。主があわれんでくださったからに過ぎないのです。

もしも本当に義なる人の祈りだけが聞かれるのなら、私の祈りは聞かれません。自分の力で義なる人になれる人はだれもないからです。しかし、キリスト業界にもリベラルの波が押し寄せています。あの人のように信仰を熱心に行うなら、この人のように聖霊様に従うなら、必ず祈りが聞かれるという迷信です。信仰を人間理性の方程式にあてはめること、すなわちリベラル化です。そして、それに従う者を増やしてキリスト業界での成功を得るのです！おめでとうございます。とっておめでたい話ですが、私はそうなれませんし、なりたくもありません。なぜか？わたしがもし自分の熱心な信仰、祈り、断食によって少しでも成功を収めたら、絶対に自分を誇るからです。そして、知らないうちに「私のようにになりなさい。」というカン違い野郎に絶対になってしまう自信があるからです。

義人とは誰か。それはあなた自身です。ただし、ただ一人の正真正銘の義人イエスとひとつになった義人であるあなたです。私は自分のうちに義なるところが少しもない、そして聖霊によろうが、断食によろうが、祈りによろうが、自分の肉はまったく改善されることはない、と承知した上で、主イエスの十字架によって、義人となっていることを高らかに宣言できるのです。互いに罪を言い表すときも、長老のところに祈ってもらいに行くときもこの十字架のわざと、それをなされた主の愛を思い出しながら行くのです。イエスと共なる「完全な義人」として。なんと感謝なことでしょうか。

ここ数週間、ヤコブ書をメインとして礼拝で語って来ました。ヤコブ書の意義は何でしょうか。ここには聖書の愛、恵みという中心概念にあるまじき厳しいことば、行いを強調する記述があふれています。けれどもこれは主の愛を引き立てるスパイス、ハーブ、わさびではないかと思ったりしました。主の愛を深く味わうためには、主の義、清さを決して忘れるわけにはいかないと思うのです。その清さがわかるほどに、罪の赦しの愛がはげしく迫ってくるのです。

主は復活によって今も生きておられること、そしてその命をわたしたちに映してくださることをこのヤコブ書にあらわし、その義を強調することによってその愛をもっと深く、もっと高く掲げてくださったのです。その愛を感謝します。

ヤコブ書の中で戒められている金持ちのこと、人を恐れず神を恐れるべきこと、信仰の薄いものへの戒め、これらを私に当てはめてみるならば、私の肉はこう叫びます。「金持ちになりたい！人を恐れないために人を恐れさせてやりたい！信仰はない！」しかし主はそのような私を救い出し、主の家族に入れてくださった。そして、愛によってこう言われているのです。「私と一緒に祈ってくれるか。私と一緒に人に関わってくれるか。私の与える報いを受け取ってくれるか。」と。

主の命令を到底「やります！」と言えない情けない自分だけども、主の家族として交わりながら、主の行き方にならうことも万が一、あるかも知れません。

「どんな誓いも 命令も できると言えぬ わたしでも  
主に交われば、主（あか）くなる」